

伏見先生の折紙

小谷恒之

伏見先生手作りの折紙が私の研究室にある。計算機用のファンフォールド紙の古いもので無造作に作られたものやお菓子屋の包装紙を用いた複雑なものも含まれている。昨年（一九八六年）の夏、私共の物理学教室が新築の建物に移転する際、前に頂戴した『折紙の幾何学』（日本評論社）のなかで、正多面体の作り方とその基礎の数学的な証明の解説の巧みさに感心したことや国際会議のレセプションで実演されていたことなどを思い出して、しばらく整理の手を休めて、思い出にふけてしまった。

昭和五十一年の夏、大阪大学の伏見研関係者が中心になって、富士山麓で伏見セミナーを開いた際、先生のお書きになった文章が散逸してしまわないように集めておこうという話が持ち上がった。阪大時代の先生の研究室で書類が

乱雑に山積していたのを覚えている私共にとって、先生のエッセイが有益だっただけに氣運が盛りあがった。集める場所が私の研究室という大役を押しつけられた。

その後、先生のご記憶をお聞きし、奥様が整理しておられた目録や手元におありの別刷りを送っていただき、また、河出書房の阿部昭氏や先生のファンだった亀山（旧姓野口）紅美子さんが集めておられた著作目録、『図解科学』（雑誌『自然』の前身）の解説のコピーや新聞・諸雑誌の切り抜きを頂戴して、それらを基に第一近似のリストを作り、伏見セミナー関係者に補足していただくことになった。『物理学講演集』（文部省科学局・学術研究会共編―丸善発行）は専門の論文なので、また『研究と大学の周辺』（共立出版、昭和四四年刊）と『相對論的世界像』（弘文堂、アテネ新書）に収録されているものは省略することにした。

先生が昭和十三年に大阪大学理学部会誌に書かれた文芸作品（？）『北海行』は、先生が大阪へ来られて間もない頃の作品で、大変印象的だから是非収録しろと注文がいくつ寄せられたが、ガリ版刷のパンフレットだけに、戦災を経てなかなか入手できず、理学部の先輩方に次々に尋ねまわって、結局谷川安孝先生のご尽力でやっと手に入れた。雑誌の総索引からリストを作り出す仕事は私の記憶では次の方々が主になって下さったと思う。順不同で当時の職と括弧内に担当雑誌や文献を記すと、日立中研の山田要三郎

氏（岩波の科学・科学朝日）、北大の鈴木義男氏（自然）、神戸大の麦林布道氏（自然・蟻塔・基礎科学）、阪大の伊藤博氏（蟻塔・日本物理学会誌）、原研の山本和子さん（原子力学会誌）、日立中研の百々太郎氏（弘文堂の理論物理学新講座・河出書房の知性）、伏見論氏（大学新聞・学士会会報等の諸刊行物）の方々が浮かんでくる。数学セミナー・季刊哲学・氣象集誌・科学朝日等の定期刊行物は阪大教養部物理学教室秘書の田中瑞枝さんが図書館で調べてくれた。皆様から寄せられたリストをもとに、コピーを次々に作成し、内容別に分類番号を付して整理し、改めてリストにまとめたのも田中さんである。専門誌と違って、これらの雑誌の製本には欠号の多いのにも驚いた。ちょうどその欠号が吹田キャンパスの図書館にあるというので、彼女が吹田までコピーをとりにいったこともある。今なら電話でコピーが頼めるのだが。中央公論等の旧い号は理科系大学だった阪大にはなく、岩波の牧野正久氏にコピーをお願いしたり、愛媛大学の百々太郎氏（当時日立中央研）に国会図書館まで探しにいったも多かったりした。このほかにも、多数の方々のご尽力で次々に阪大で手に入らないもののコピーが寄せられてきた。もちろん阪大の内山龍雄・後藤憲一・西山敏之・伊藤博・砂川重信の諸先生にはいろいろと相談ののっていただいた。この月報をお借りして、ご尽力いただいた方々に改めて心からお礼を申し上げたい。特にワープロもなく、コピーを

取るのも不便な時代に、図書館にこもって探して下さった田中瑞枝さんのご尽力に感謝の意を表したい。冒頭に書いた伏見先生の折紙はこれらのコピー類を先生が見にこれらとときに作成された記念のものである。

さて、こうして集めてみたら、大型のファイル・ボックス一段に一杯になってしまった。ご指導いただいた先生について、私がいかに知らないことが多いか恥入った次第である。その上、伏見先生が新しく書かれるたびに、雑誌の原本を送って下さるので、増える一方である、当初二三冊の本ぐらいいままとまるのかと予想していたのと桁違いの量で、私共の力不足で出版も簡単にいかない状態だと判明した。先生の古希のお祝いにはとうとう一部だけを収録して、「伏見康治70年の軌跡」の小冊子にまとめさせていただき、その巻頭を飾ったのが前述の「北海行」である。

これらのコピーを集めている途中、私の方にはもっぱら読み役で、特に単行本『卵の実験』（福音館）やこの著作集の第2巻に収録されている「卵は逆立ちする」等を読んで、早速私も実験を試みた。成功するより先に、私の方で目まがいとして、医師からメニエール症候群と診断され、私の方がダウンしてしまったのはお笑い草である。その頃、先生の文章に刺激されて買ったエッセイヤーの本を眺めていたのも影響したのかもしれない。

昭和十八年九月に阪大に入学した私が最初に聞いた先生

何本も先生にも食べていただいたが、今なら数万円の昼食代ということになるだろう。宿のお手伝いさんが、伏見先生が朝早くから辞書なしで外国語の本を読んでおられると眼を丸くして私に報告していたのも隔世の感がある。学部一年生はその年の秋には大阪へ引き上げたが、図書や実験器具の番人というので、篠崎吉郎氏（現帝塚山学院大学教授・信貴豊一郎氏（現大阪市大教授）と私の三人は、翌年四月まで居残りになった。学徒動員から生徒は帰ってきたが、中学校の先生の方は戦地から戻られないということで、私共が数学や物理の授業を半年間教えることになった。教えた興譲館の生徒の中から岡山の第六高等学校へ多数入学して、開校以来の記録を作り、大評判になったが、私共の物理の勉強はさっぱりで、荷造りの縄結びを覚えたくらいで大阪へ戻ってきた。それでも三年で卒業させてもらえたのだから、おおらかな時代だった。

卒業後、私は伏見研に加えていただいて、理論の勉強を一からやり直すことになった。始めは多元数・群論・スピノール解析などの数学や場の理論（特に重力場）のラグランジュ形式の基礎論などを勉強させられた。やがて、ミューオンやパイ中間子を用いた実験が始め、素粒子物理学が独立した分野として発展しだし、私自身は牧野さんたちと共に伏見研の主流から離れて、現象論的研究を始めた。木庭二郎先生が講師として阪大へこれ、伏見研の中にも

のご講義は電磁気学で、ボールの本をもとにして、EとD、BとHの基本的な場の概念を明解に示して下さい下さったのが印象的だった。『確率論及統計論』を読んだの印象から、数式を駆使して展開されるのかと予想していたのが、物理的な描像から入って行かれたのでより新鮮さと感激を覚えたのかもしれない。なるほど、ガモフの『不思議の国のトムキンス』を訳し、『驢馬電子』を書かれた先生だなあと感銘を深くしたので、余計に記憶に残っているであろう。講義の最後の方はボールの光学の内容に近く、予想通り、電磁波に関する数式を駆使して光の諸性質を導き出された。昭和二十年三月十三日阪大理学部周辺の焼夷弾が投下され、ちょうど泊りがけで実験をしていた私共が理學部の建物の消火に成功し、続いて周辺の民家の防火活動を自発的行った。「消火活動に挺身し、云々」という表彰状を物理学教室主任伏見康治という名でいただいたのが、今も手元に残っている。この空襲でガス・水道が不便になり、物理学の学部一年生と物理関係の図書・一部実験装置が岡山県井原の興譲館中学校へ疎開した。最後の荷物を大八車で運んでいたのが、八月十五日の正午、玉音（敗戦）放送の最中という皮肉なことになった。

進駐軍優先のため、帰るに帰れず、伏見先生や諸先生が講義に來られることになった。輸送事情が悪く、桃や松茸がいたむので値下がりし、米の代わりに松茸の蒸し焼きを

現象論をやっている人がいたのですかと驚いた顔をしておられたのが眼の前に浮かんでくる。昭和二十六年秋、朝永振一郎先生の助手として、私は東京の小林理學研究所に就職し、伏見研を退学（？）した。その後、何度もお目にかかる機会があり、あるとき「人生はいい意味での妥協が必要ですよ」と先生にいわれ、先生のたどられた人生航路もこのお考えのようだし、私自身もこの言葉を座右銘として日頃ことあるごとに反省の資とさせていたにいたる。伏見先生は二次元くり返し文様から折紙へとご自分の数学・物理学の知識を生かしてこられた。停年を控え、私も何をテーマとするかを考える時機にきているようである。

私共のささやかな努力に、さらに多くの追補がなされて、今回この著作集八巻としてまとまり、きれいな印刷で読み返す機会が与えられたことは、まことに喜ばしい限りである。

（大阪大学教授）

次回配本予定（第六回）
第7巻 原子力と平和

解説 岸田純之助
九月中旬刊 予価三〇〇〇円